

### 落ち着ける場所

仙台市若林区の連坊小路小。始業時間を少し回ったころ、一人の児童が校門をくぐった。

「おほよし」。特殊学級「なかよし学級」一組の窓から、椿井友成教諭が手を振る。「一人で登校する練習です。ほら、お母さんが後ろから、そっと見守っているでしょ」

## 宮城 変わる障害児教育

### 第1部 将来構想の波紋

障害児の学習状況 宮城県内で 校が小学部461人(453人)は障害児教育を受ける児童生徒数 中学部343人(326人) 高等が増加傾向にある。本年度は特殊部853人(836人)。全体で学級が小学部1308人(前年は3590人(3486人))で、度1260人)、中学校625人 1994年度に比べ799人増え(611人)、盲、ろう、養護学級だ。

### 態勢整える必要

七月に策定された基本理念には「子どもや保護者の希望を尊重」との文言が公表されると、保護者の間に「特殊学級が選択の余地は残った。将来構想に特殊学級に関する記述はないが、県教委が広げた。支援室は法定的に希望者は特殊学級も認められた学級扱いではないため、予算配分や人員配置への不安を口にすると支援室が併置される学校関係者もいた。ケースもあり得る」と説

## 支援室と併置も可能

ができる。家庭と学校の連携も密にしやすいと、障害児教育の地域拠点となる特殊学級の利点を挙げる。

### 中間報告に動揺

宮城県障害児教育将来構想は、すべての小中学生が通常学級に在籍することを目指す。必要に応じて、四一六年の児童四人が個別の指導計画に基づいて学ぶ。

「集中できる時間が短い子どもは、別室での遊びを促すなど工夫して

### ③ 特殊学級



連坊小路小の遠足は、なかよし学級の児童も交流学習の一環で参加した。4月、仙台市太白区

この教師は「共に学ぶ教育の効果は認めつつも、手厚い人員配置や少数学級の実現など、受け入れ態勢をしっかりと整えるべきだ」と注文を付ける。

子どもが特殊学級に通う多賀城市の母親も「障害特性はさまざま、教育の在り方も一つに限定せ

ず、選択制にしては」と 都道府県では初めて、提案。「保護者と教師が障害によって教育の場を互いの声に耳を傾け、話分けない方針を打ち出し、し合うことも大切。地域 多賀城市、先駆者として、学ぶために必要なこと、その成り行きは注目を集めれば、親もできる限るが、実現までの道のりは険しい。

## 教育